

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしやう
ぶつぽう
しやかい
第四章 仏法と社会

ようじん
用心

かたきをしらねば、かたきにたばらかされ候ぞ。
知 証 そうつろう

108 光日房御書
こうにちぼうごしよ

用心
ようじん
1255 ページ 4 行

「眉は近けれども見え^みず、自らの禍^{わざわ}い^いを知ら^しず」とはこ
の謂^いいか。

（
162 曾谷入道殿許御書^{そやにゆうどうどのもとごしよ}

用心
1393 ページ 16 行

ぜんしや 覆 前車のくつがえすは後車のいましめぞかし。 戒

きようだいしやう
171 兄弟抄

ようじん
用心 1474
ページー7行

構

構

ごようじんそうろう

憎

ひとびと

かまえてかまえて御用心候べし。いよいよにくむ人々

狙

そうろう

おん酒

盛

よる

いっこう

とど

たま

ねらい候らん。御さかもり、夜は一向に止め給え。ただ

にようぼう

さけ打

の

ごふそく

たにん

女房と酒うち飲んで、なにの御不足あるべき。他人の

昼

おん

懈

さけ

はな

ひるの御さかもり、おこたるべからず。酒を離れてねらう

隙

あ

ひま有るべからず。

しゅくんににゆうしほうもんめんよどうざいじ

よどうざい

まぬか

こと

(197 主君耳入此法門免与同罪事 (与同罪を免るるの事)

ようじん

用心
1540 ページ 17 行)

ふみごらん

のち

決

ひやくにち

あいだ

この文御覧ありて後は、けっして、百日が間、おぼろけ

同 隸

たにん

わ いえ

よなか おん

ならではどうれいならびに他人と我が宅ならで夜中の御

酒 盛

しゅ 召

とき

昼

急

さかもりあるべからず。主のめさん時は、ひるならばいそ

参 たも

よる

さんど

とんびよう

よしもう

ぎまいらせ給うべし。夜ならば、三度までは頓病の由申

たま

さんど

過

げにん

たにん

語

させ給いて、三度にすぎば、下人また他人をかたらいて、

辻 見

ごしゅつし

つじをみせなんどして御出仕あるべし。

しじようきんごしやかぶつくようじ

(204 四条金吾釈迦仏供養事

ようじん

用心

1560

ページー3行)

夜 ようじん

よめぐ

とのばら 語

もち

つね

よるは用心きびしく、夜廻りの殿原かたらいて用い、常に

寄 合

こんど みうち

出

はよりあわるべし。今度、御内をだにもいだされずば、

じうつ く うち

者 狙

汚

死

十に九は内のものねらいなん。かまえて、きたなきしに

すべからず。

(208 四条金吾殿御返事

しじょうきんごどのごへんじ

(不可惜所領の事)

ふかしやくしよりよう こと

用心 ようじん
1584 ページ 12 行

ごへん はら悪 ひと

御辺は腹あしき人なれば、火の燃ゆるがごとし。一定人

賺

にすかされなん。また主のうらうらと言和らかにすかさ

たも

ひ みず

おん 渡

せ給うならば、火に水をかけたるように御わたりありぬと

おぼ

覚ゆ。

(209 四条金吾殿御返事 (世雄御書)

しじようきんごどのごへんじ

せおうごしよ

ようじん

用心 1590 ページー5 行)

たんき

ひ も

あなたは短気であるから、火の燃えるようなところがあります。か

ひと あし

しゆくん

ならず人に足をすくわれることでしよう。また、主君がのどかに、

ことば

ひ みず

言葉やわらかにいいいくるめようとするならば、火に水をかけたよう

に、
主君しゅくんに説とき伏ふせられてしまおもうだろうと思われまおもす。

愛

離

おも

妻

いかにいとおしはなれじと思うめなれども、死しぬれば

甲斐

しよりよう

惜

思

かいなし。いかに所領をおししとおぼすとも、死しては

たにん

もの

栄

としひさ

お

他人の物。すでにさかえて年久し。すこしも惜しむことな

前

々

もう

かれ。またさきざき申すがごとく、さきざきよりも

ひやくせんまんおくばいごようじん

百千万億倍御用心あるべし。

209

しじょうきんごどのごへんじ
四条金吾殿御返事

せおうごしよ
(世雄御書)

ようじん

用心

1590

ページー10行)

夜

ひとり 外

い

たも

よるは、いかなることありとも、一人そとへ出でさせ給う

かみ おん召 あ

げにん 御所

べからず。たとい上の御めし有りとも、まず下人をこそへ

遣

内々 いちじよう 聞 定

腹 卷

つかわして、ないない一定をききさだめて、はらまきを

着 鉢 卷

せんごそう ひと 立 しゆつし ごしよ

きて、はちまきし、先後左右に人をたてて出仕し、御所の

傍 ころ 寄

館 わ 館 脱

かたわらに心よせのやかたか、また我がやかたかにぬぎ

置 参 たも いえ 帰

先 ひと

おきて、まいらせ給うべし。家へかえらんには、さきに人

い 戸 脇 橋 下 厩 後

を入れて、とのわき、はしのした、むまやのしり、

高 殿 いっさい 暗 見 い

たかどの、一切くらきところをみせて入るべし。

焼 亡 わ いえ ひと いえ 財

しようもうには、我が家よりも人の家よりもあれ、たから

惜おほ 慌あわ ひ 消き 寄よ
を おしみて あわてて 火を けすところ へつつと よるべから

ず。 まして 走り出はし ずること なかれ。 出仕より 主の 御ともししゅつし しゅ おん 供

おん 帰

とき

御 門

うま

下

暇

差

て 御かえりの 時は、 みかどより 馬より おりて、 いとまのさ

合 由

傍

官

もう

急

帰

かみ

し あうよし、 ぼうかんに 申して、 いそぎかえるべし。 上の

仰

夜

い

おん 供

ごしよ

久

お おせなりとも、 よに入い って 御ともして 御所に ひさしかる

帰

だいいちこころ

深

用

心

べからず。 かえらんには、 第一 心に ふかきようじんある

必

敵

窺

ひと

べし。 ここを ばかならずかたきのうかがうところなり。 人

酒 給

もう

怪

ことば

出

の さけた ばんと 申すとも、 あやしみて、 あるいは 言をい

もち

だし、 あるいは 用いること なかれ。

(
212
四 条 金 吾 御 書
し じ よ う き ん ご こ し よ

用 心
よ う じ ん
1599
ペ
ー
ジ
ー
14
行
)

敵かたきと申もうす者ものは、わすれさせてね狙らうものなり。

215 四しじょうきんごどのごへんじ条金吾殿御返事せつこしょうぐんごしよ（石虎將軍御書）

用心ようじん
1608 ページ 7 行

さきざき ようじん

健 気

ほけきよう しんじん

前々の用心といい、またけなげといい、また法華經の信心

ゆえ

なん

ぞんめい

たま

つよき故に、難なく存命せさせ給い、めでたし、めでた

し。

(220 四条金吾殿御返事 (法華經兵法の事)

しじようきんごどのごへんじ

ほけきようへいほう こと

ようじん

用心 1622 ページ 7 行

ようじん

ゆうき

ほけきよう ごほんぞん

ふだんからの用心といい、勇氣といい、また法華經 (御本尊) への

しんじん つよ

ぶじ いのち

信心が強かったので、無事に命をながらえることができたのです。

ほんとう

本当にめでたいことです。